HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「居住型ゲストハウス」居住者の住まい方に対する意識と休日の過ごし方 : 居住者間交流を視点とした考察
Author(s)	石川, 美澄; 山村, 高淑
Citation	生活学論叢, 16, 27-38
Issue Date	2010-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49523
Rights(URL)	http://lifology.jp/
Type	article (author version)
Note	研究ノート
File Information	ishikawa.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究ノート

「居住型ゲストハウス」居住者の住まい方に対する意識と休日の過ごし方

居住者間交流を視点とした考察

A Study on the residents' viewpoints concerning their resident status and their ways to spend holidays: A Case of Residence Type Guesthouse in Tokyo.

石川美澄　ISHIKAWA Misumi [1)]
山村高淑　YAMAMURA Takayoshi [2)]

The purpose of this study is to clarify the relationships between resident status and resident interaction. The study will then consider the residents' viewpoints concerning their resident status and their ways to spend holidays. As a specific case in point, the study examines the Residence Type Guesthouse *"Tokyo Guesthouse (Tentative)"* located at Central Tokyo.

As a result, the followings are found:

1) Over 80% of Tokyo Guesthouse residents are young workers.
2) Some of them pointed out that the merit of living in a residence type guesthouse is to be able to have the opportunity and space for a full conversation with other residents.
3) On the other hand, some of the residents try to prevent excessive interference with other residents.
4) Some of them often go out with other residents.

キーワード : 居住型ゲストハウス、シェア居住、住まい方、交流
Keywords: Residence Type Guesthouse, Shared Housing, Resident Status, Resident Interaction

1．はじめに

1－1　研究の背景と目的

近年、ライフスタイルや家族形態の変容、海外生活経験者の増加、インターネットの普及などにより、血縁や婚姻関係を基盤としない居住形態として「シェア居住[1)]」を選択する人びとが増加傾向にある〔丹羽ら 2005、小林 2007、丁ら 2008、中村ら 2009 ほか〕。このシェア居住には、住居構造やそこでの住まい方、賃貸契約方法などによって、ルームシェアやハウスシェア、ゲストハウス、ミングルなどの様々なタイプが存在している〔丁ら 2008〕。本稿ではこうしたシェア居住形態のうち、ゲストハウスに着目して論を進める。なお本稿で取り扱うゲストハウスとは、中村ら〔2009：423〕の研究を参考に、「居住型ゲストハウス」のことを指すものとする。すなわち、「最短の契約期間が概ね一カ月以上、且つ敷金や礼金、保証人などが不要な、居住者と業者が個別に契約を交わす賃貸物件であり、キッチンなどの共有スペースがある住居」のことである。なお、関連する用語の定義については、1-2 にて詳述する。

ゲストハウスに関する既往研究においては、物件数や分布状況、建物としての物理的空間的特性のほか、居住者の属性や住居選択理由、共有スペースの利用実態、住居内における居住者同士の挨拶や会話の交流頻度などが明らかにされている。例えば、ゲストハウスの居住者が現在の住まい方を選択した理由は、経済性や安全性、居住者同士の交流などを求めた結果であることや〔丁ら 2008：76、中村ら 2009：426〕、ゲストハウス居住者はこうした住まい方に対して、「寂しくない」と感じたり「出会い」があったりする点にその価値を見出していること〔住宅総合研究財団編 2007：14〕などが明らかにされてきた。また、丁ら〔2008：77〕は、居住者らの共有スペースの利用時間について調査を実施し、休日の共有スペースにおける滞留時間が平日のそれと比して長いことを明らかにしている。

これらの既往研究では、滞留時間の長さや居住者間の挨拶の頻度などについては明らかにされているが、ゲストハウス内でどのような会話が交わされているのか、また共有スペースで行われている居住者間の交流とは一体どのよう

1) 北海道大学大学院　国際広報メディア・観光学院　修士課程
Hokkaido University
2) 北海道大学　観光学高等研究センター
Hokkaido University

なものなのか、それらの具体的実態についてはほとんど明らかにされていない。

以上を踏まえ、本稿では、ゲストハウスの居住者を対象として、①住まい方に対する意識、及び②休日の過ごし方の実態を明らかにすることを目的とする。その上で、③居住形態が、居住者間の交流にどのような影響を与えているのかという点について考察を試みる。本稿の構成としては、第2章で居住型ゲストハウスの概要と特徴を、第3章で居住型ゲストハウスに住まう人びとの住まい方に対する意識を、第4章でそれら居住者の休日の過ごし方に関する実態を整理する。そして、第5章で居住形態と休日の過ごし方にどのような影響が見られるのかについて考察を行う。

１－２　用語の定義

本稿におけるシェア居住、居住型ゲストハウス、住まい方、休日、交流の5つの用語について、便宜上以下のように定義する。なお、これらの定義に関しては、暫定的であるため今後より精緻化させていかなければならないと考えている。

①シェア居住：既往研究によるシェア居住の定義はいくつか見られるが、本稿では丹羽ら〔2005〕と飯田ら〔2006〕、及び小林〔2007〕による定義を整理した上で、以下のように定義を行う。

まず、丹羽らは、シェア居住という用語は用いていない。同義語として、「共住住居」を用い、その定義を「血縁婚姻関係を持たないもの同士の同居が行われている住居」(原文のママ)、または「血縁婚姻関係を持たないものを含む同居が行われている住居」（原文のママ）としている〔丹羽ら 2005: 190〕。この「共住住居（シェアハウス)」の特徴の一つは、居住形態を指しているのではなく、住居の在り方として一つの形態を示す語として用いられている点にある。なお、丹羽らは、「シェアハウス」という用語を共住住居と同等の意味で使用している。

次に、飯田らは、都市において自発的に他者と集まって住もうとする若年層が現れてきていることと、情報化や晩婚化が進んでいる現代社会における集住の意義を見直す必要性があることを指摘している。その上で、シェア居住を「友人、知人または全くの他人同士など、血縁及び婚姻関係に縛られることなく1つの住居を共有し、生活する住まい方」と定義している〔飯田ら 2006: 45〕。

また、小林は、従来一般的であった兄弟姉妹や友人関係による共同生活に加え、全く面識のない者同士が出会い、共同生活を始める住まい方が定着しつつあると指摘している。その上で、シェア居住の定義を「家族ではない複数の居住者が台所などを共用して一つの家に住む形態」としている〔小林 2007: 4〕。

これらの既往研究を踏まえ、本稿ではシェア居住を、「血縁婚姻関係に基づかない複数の居住者が台所やリビングなどを共同利用しながら、一つの住居に住む居住形態」と定義する。なお、この形態で居住している者を「シェア居住者」とする。

②居住型ゲストハウス：既往研究によるゲストハウス及び居住型ゲストハウスの定義はいくつか見られるが、本稿では丁ら〔2008〕及び中村ら〔2009〕による定義を整理した上で、以下のように定義を行う。

まず、丁らは、居住型ゲストハウスという用語は用いておらず、ゲストハウスという用語を採用している。そして、そのゲストハウスは「主に業者が専門的に経営または管理しており、家具、家電、日常生活における備品が付属して」いる住居であり、共同で利用するスペースの清掃などは業者が管理する場合が多いと特徴付けている〔丁ら 2008：76〕。また、居住者の定員は5～120人程度であり、契約期間は1ヶ月以上必要であるとしている。

一方、中村らは、居住型ゲストハウスという用語を用い、それを「老朽化したアパートや民家などの中古物件を所有者から一括で借り受けて、短期滞在用の共同住宅として、入居希望者に個別に転貸される賃貸物件のこと」と解説している〔2009: 423〕。その上で、居住型ゲストハウスを以下の3点に該当する物件としている。すなわち、「(1)最短の契約期間を1ヶ月とする賃貸物件であること、(2)入居者同士が共通して使用できる共有空間が存在すること、(3)世代・国籍・性別等による入居制限を設けていないこと」である〔中村ら 2009: 423〕。

これらを踏まえ、本稿では、居住型ゲストハウスを「最短の契約期間が一カ月以上、且つ敷金や礼金、保証人などが不要な賃貸物件であり、居住者同士が共用可能なスペースがある住居」と定義する。なお、そこで生活を送っている者を、本稿では便宜上、居住型ゲストハウス居住者（以下、GH居住者）と表記する。

③住まい方：建築物としての住宅と、住居内で展開される生活を含む生活一般のことを指す[2)]。

④休日：就労や学業がない日を指す。

⑤交流：本稿では、住居内外における居住者間の相互交渉を指す。

１－３　調査対象事例と調査方法、及び事例選択の妥当性

１）調査対象事例

本研究の調査対象事例として、東京都区内にある１軒の居住型ゲストハウス「(仮称) 東京ゲストハウス（以下、東京 GH)」、及びそこに居住している人びと（以下、東京 GH 居住者）を取り上げる。

東京 GH は東京都区内にあり、JR や私鉄・地下鉄の各最寄り駅からいずれも徒歩 10 分圏内に位置している。周囲は一戸建てを中心とした住宅街であり、東京 GH から徒歩 10 分圏内にはスーパーマーケットやコンビニエンスストア、100 円ショップ、衣料量販店、カラオケやゲームセンターなどのアミューズメント施設などがある。

また、東京 GH は二階建てで、間取りはドミトリー[3]（1 階に 2 室、2 階に 4 室）と各階にある共有スペース（キッチン・ラウンジ[4]・シャワー室・トイレ）となっている（図 1 参照)。各ドミトリーには、その広さに応じて 1 室につき 2～8 ベッドが配置されており、最大入居者数は男性 14 名、女性 16 名、計 30 名である。なお、賃貸料は 1 人 1 カ月当たり 41,000 円（1 ベッド当たり。光熱費等は含まれているが、コインランドリー利用料は別途必要）である。

２）調査方法

本研究では、調査方法として、アンケート調査と聞き取り調査を採用した。なお具体的な調査方法については、それぞれ関連する章において詳述する。

３）事例選択の妥当性

本研究における調査対象事例として、居住型ゲストハウスを選択した理由は以下の二点である。

第一に、居住型ゲストハウスでは、従来のルームシェアなどに比べ、血縁婚姻関係や友人知人関係など、これまでに面識のなかった者たちとの共同生活が展開されている居住形態であると考えられる点である。従来のルームシェアやハウスシェアは、ある 1 人の者が部屋もしくは住宅の賃貸契約を交わし、その者の友人・兄弟姉妹関係にあたる者が同居人となることが一般的であった〔小林 2007: 4〕。それに対し、居住型ゲストハウスはシェア居住希望者がその事業者のホームページや「mixi」などの SNS サイトを利用した上で、1 部屋もしくは 1 ベッドを事業者と個々に賃貸契約を交わす入居システムを採用している。したがって、この入居システムによりこれまでに面識のなかった者との共同生活を送ることが可能であり、シェア居住を通した居住者同士の接触や交流の実態を観察しやすいと考えられる。

第二に、調査者自身がそこに住み込むことが可能であり、参与観察やインタビューを行う上で調査が行いやすい点である。

次に、居住型ゲストハウスの中でも、特に東京 GH を選択した理由は以下の二点である。

第一に、個別の居住型ゲストハウスを調査対象事例とした既往研究では、居住者 10 名以下を対象としたものが多く、比較的居住者数の多い居住型ゲストハウス[5]を対象とした報告が見られなかった点である。したがって、これまで明らかにされてきた調査研究に加え、居住者の交流や生活実態等について新たな調査結果や考察を行うことが可能であると考えられる。

第二に、東京 GH が全室ドミトリーである点である。特に、既往研究において、個室居住者よりもドミトリー居住者のほうが、共有スペースの滞留時間が長いことが明らかとなっているため〔丁ら 2008: 77〕、居住者同士の会話や交流の実態を観察しやすいと考えられる。

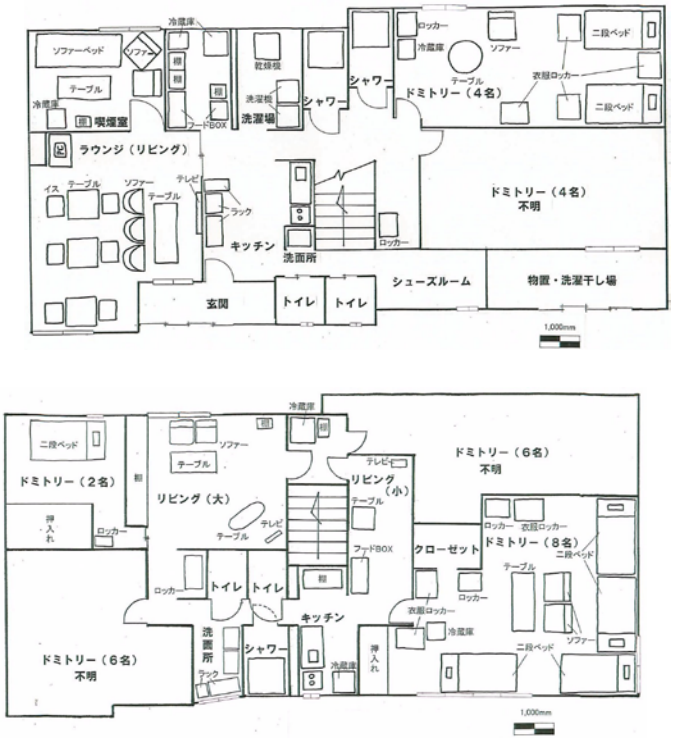

図１：東京 GH の間取り図（上図：2 階、下図：1 階）

出所：筆者ら作成。

２．居住型ゲストハウスの概要と特徴

２－１　概要

首都圏における居住型ゲストハウスの物件数は 1990 年には 2 件であったものの、2007 年現在では 429 件と増加傾向にある[6),7)]。小林〔2007: 14-15〕は、居住型ゲストハウスを含むシェア居住が増加している背景として、海外や旅

行先での共同生活経験者の増加、インターネットの普及による情報検索やルームメイトの募集などの簡易化[8]、非婚・晩婚化の影響など6つ[9]の要因を挙げている[10]。

また、居住型ゲストハウスの前身は「外人ハウス」だとされているが[11]、その誕生の経緯や要因についての学術的な調査研究もほとんどなされていない。この点については、今後さらなる調査を行った上で居住型ゲストハウスの歴史的背景を整理する必要がある。

２－２　特徴

居住型ゲストハウスの空間面での特徴は、①何らかの共有空間が存在する点、②住居規模に幅がある点（したがって居住者数にも幅がある）、③生活を送る上で必要な家具家電が常設されている点[12]などである〔丁ら 2008、中村ら 2009〕。また、経営管理・契約上の特徴は、①賃貸物件である点、②賃貸契約期間が最低1ヶ月以上である点、③インターネットを活用した物件の情報交換が行われている点などである〔丁ら 2008、中村ら 2009〕。

一方、居住者属性の特徴は、①20代から30代の単身者が多い点、②何らかの労働に従事し、収入を得ている者が多く、無職の者は少ない点、③居住理由として経済性や好立地といった点以外に、安全性や共同生活の楽しさを挙げている点などである〔丁ら 2008、中村ら 2009〕。

３．東京GH居住者の住まい方に対する意識

３－１　東京GH居住者の属性

東京GH居住者の住まい方に対する意識を明らかにする前に、東京GH居住者の属性について整理しておく。

東京GHにおける居住者の属性を把握するために、2009年7月28日から8月13日までの期間に、東京GHに居住していた26名（調査者を含まない男女各13名。なお、この期間中における居住者の入れ替わりはない。）を対象に、アンケート調査及び聞き取り調査を実施した。その結果、明らかとなった東京GH居住者の性別・年齢、出身地、就労形態の3点を右記の表1～3にまとめる。

これら表1～3を踏まえると、東京GH居住者は20代から30代の若年層の男女が中心であり、国内・海外各地の出身者で構成されていることが明らかとなった。特に、女性居住者13名の内5名は韓国人であり、内4名はワーキングホリデービザを取得した上で来日していることが分かった。また、居住者のうち8割は何らかの仕事に従事していることがわかった。なお、学生は、就業と学業を両立している者と学業のみに従事している者との2つに分けられた。

表１：東京GH居住者の性別と年齢[*1]　（単位：人）

	男性	女性	計
20代	9	9	18
30代	2	4	6
40代	1	0	1
不明[*2]	1	0	1
計	13	13	26

[*1] 2009年7月28日から8月13日までの期間中、東京GHに居住していた者へのアンケート調査及び聞き取り調査結果による。この期間中は、10代及び50代以上の者はいなかった。
[*2] この1名に関しては、調査期間中にアンケート調査及び聞き取り調査を実施する機会が得られなかったため、不明とした。なお、他居住者への聞き取り調査の結果、おそらく20代後半から30代前半であろうということはわかった。

表２：東京GH居住者の出身地[*1]　（単位：人）

	男性	女性	計
北海道	1	0	1
東北	1	0	1
関東	2	2	4
東海	1	2	3
北陸	1	0	1
近畿	2	1	3
四国	0	1	1
九州・沖縄	1	2	3
韓国	0	5	5
ネパール	1	0	1
オーストラリア	1	0	1
不明[*2]	2	0	2
計	13	13	26

[*1] 2009年7月28日から8月13日までの期間中、東京GHに居住していた者へのアンケート調査及び聞き取り調査結果による。
[*2] これら2名に関しては、調査期間中にアンケート調査及び聞き取り調査を実施する機会が得られなかったため、不明とした。

表３：東京GH居住者の就労形態[*1]　（単位：人）

		日本人		外国人		
	内訳	男性	女性	男性	女性	計
就労者	就業している	8	5	0	0	13
	学業も兼ねている	1	1	1	1	4
非就労者	学業のみに従事	0	2	0	0	2
	無職	0	0	0	0	0
WH 来日者	就業している	－	－	0	4	4
	就業していない	－	－	0	0	0
不明[*2]		2	0	1	0	3
合計		11	8	2	5	26

[*1] 2009年7月28日から8月13日までの期間中、東京GHに居住していた者へのアンケート調査及び聞き取り調査結果による。なお、表中の「WH来日者」は、ワーキングホリデービザを取得した上での来日者のことを指している。
[*2] この3名に関しては、調査期間中に、アンケート調査及び聞き取り調査を実施する機会が得られなかったため、不明とした。ただし、何らかの仕事に従事し、日本国内においては学生でないということが周囲への聞き取り調査により明らかとなっている。

３－２　住まい方に対する意識について

１）調査概要と対象者属性

東京GH居住者に対し、住まい方に対する意識を尋ねる聞き取り調査を実施した。本稿では、3-1で取りまとめた東京GH居住者26名の中から5名を取り上げる（表4参照）。これら5名の抽出方法は、以下のとおりである。

まず、居住者26名の内、聞き取り調査を依頼する機会を得た23名に調査への協力依頼をしたところ、11名から承諾を得た。それら11名を就労形態別（就労者、非就労者、ワーキングホリデービザ取得による来日者の3つ）に分類した。次に、就労者を個々人の休日の取得方法に応じて、①休日が土日祝日にあたる者、②休日が土日祝日に関わらないシフト制による者、③休日が予め決まっておらず仕事の進捗状況による者、の3つに分類した。その上で、本稿では①から③に該当する者と④学業を兼ねた就労者、⑤ワーキングホリデーによる来日者から各1名ずつ、計5名を抽出した。

これら抽出した5名の特徴は以下のとおりである。

①A：月曜から金曜まで（以下、平日）は仕事に従事し、休日は土日祝日である。そのため、平日の夕方には帰宅している。また、休日は外出することが多く、東京GH内にはほとんどいない。

②B：3日勤務1日休日というシフト制の仕事に従事している。そのため、祝祭日に関係のない就労形態にあたる。また、早番・遅番出勤があり、それに応じて毎日の就寝・起床時間、及び出勤・帰宅時間が変動する。

③C：仕事の進捗状況に応じ、休日や出勤・帰宅時間などが変動する。そのため、多忙な時期は4,5日間帰宅しない（できない）こともある。

④D：月曜から土曜までの日中は通学し、その後就労している。また、休日は基本的に日曜日のみであり、仕事の都合上帰宅するのは深夜から明け方となる。

⑤E：ワーキングホリデービザを取得した上で来日している者で、就労している。仕事のない日は週に3日と決まっており、その日は外出したり東京GH内で自主学習をしたりして過ごしている。

このように、5名それぞれ就労形態や休日の取得状況などが異なることから、東京GHにおける共有スペースの利用状況やそこでの生活実態も異なると考えられる。そのため、本稿で上記5名の住まい方に対する意識を取り上げることは、東京GHに住まうことの意義やシェア居住者の特性の一端を考察しやすいと考えられる。

なお、聞き取り調査に関しては半構造化インタビューの手法に依ったが、主な質問項目は、(1)東京GHに住んだきっかけ、(2)東京GHに住まう以前の居住形態と今後の展望、(3)東京GHにおける生活上で個々人が気をつけていること、(4)東京GHに住まうメリット・デメリットの4項目である。

表4：住まい方に関する意識についての聞き取り対象者[*1]

	年齢・性別	就労形態 休日の取得状況	居住歴	調査実施日
A	20代後半M	就労 土日祝	約8カ月	8/2
B	20代後半M	就労 シフト制	約2カ月	8/3
C	30代前半M	就労 仕事の進捗次第	約16カ月	9/25[*2]
D	20代前半M	就労、兼通学 日曜日	約9カ月	8/4
E	20代後半F	W･H シフト制	約4カ月	8/7

*1 聞き取り対象者名は仮名とし、居住歴は8月末日時点を基準とした。表中の性別は、男性をM、女性をFとした。また、就労形態のW･Hは、ワーキングホリデービザ取得による来日者の略記である。

*2 調査期間中に聞き取り調査を実施する十分な機会が得られなかったため、後日調査を依頼した。

２）調査結果と考察

A、B、C、D、Eの5名に聞き取り調査を実施した結果を、下記の表5～8にまとめた。各表中の表現は、聞き取り対象者の発言を筆者らが補足した上でまとめたものである。また、個人名や地名については●印を用い、伏せ字とした。

(1)東京GHに住んだきっかけ

5名の東京GHに住んだきっかけを、表5にまとめた。

これらの結果を踏まえると、東京GHに住んだきっかけの一つとして、就職や進学、ワーキングホリデーなどによる生活拠点移動の必要性が生じたという点が挙げられる。それにより、同時に住まいを探す必要性も生じる。特に、我が国ではアパートなどの賃貸物件を契約する場合、一般的に敷金や保証人などが必要である。そのため、新たな場所で自活していこうとする20代から30代の若年層にとって、経済的負担が大きいと考えられる。また、民間の賃貸住宅では外国人などの入居制限を設けているところもある[13)]。したがって、住まいの選択・決定を迫られた者にとって、居住型ゲストハウスの特徴（敷金などが不要な点や一般的な賃貸物件に比べ入居者制限が低い点など）は、住まい方を決定させる一因となると考えられる。

一方で、友人知人を通して居住型ゲストハウスの存在を

知ったことで、そこでの生活に居心地の良さやそこに住まう楽しさを希求・期待する者の存在も確認できた。

表5：東京GHに住んだきっかけ[*1]

A	経済的であるという理由で東京GHを選んだ。以前住んでいたところを出ていくことになり、インターネットで●●線沿いの安い物件を探していたところ、ここが見つかったので即決した。
B	最初は、節約・貯金をするためにGHに住もうと思っていたので、以前からGHに住んでいて、知り合いでもあった●●さんに、下見に行きたいと頼んだ。そのため、入居前に3度東京GHを訪れている。そのときに、「居心地が良かったのが(入居を決めた理由として)大きいのかも」しれない。それまでは、“節約をするために、最悪の場合はGHに住もう”という考えを持っていた。
C	就職が決まったときに、面接担当者に、「どこか安く住めるところを知らないか」と尋ねたところ、GHというものがあると教えてくれた。その後、紹介されたGH事業者に電話で問い合わせたところ、東京GHには喫煙室があるということを知り、ここに決めた。当時は●●に住んでいたため、下見もせず、電話で入居を決めたため、ホームページ上にある東京GHの写真も見ずに入居した。
D	東京都区内にある学校に進学するために、物件をインターネットで探していた。一人暮らしをするために、マンションなども探したが、家賃などが高いと思っていた。そのとき、「たまたま東京GHを見つけ、学校から近かったし、空きベッドもあったので、ここに決めた」。
E	語学留学のために来日する際、知人の紹介でGHの存在を知り、そのときに初めてGHに住んだ(2003年に約5カ月居住)。「当時は、外国人が入居できるところはまだまだ多くなかった。」そのときに住んだGHは、居住者全員が家族のように思えて、楽しかったので、今回の来日でもGHに住もうと思い、東京GHを予約した。

*1 表中のGHは、居住型ゲストハウスの略である。

(2) 以前の居住形態と今後の展望

5名の東京GHに住まう以前の居住形態と、今後の展望について、表6にまとめた。

これらの結果を踏まえると、5名の東京GHに住まう以前の居住形態は一人暮らしや実家暮らしなど様々であった。一方、今後の住まい方に対する展望は、以下の3つに大別することができる。①シェア居住の意向なし、②現状維持を希望する、③状況に応じシェア居住の可能性がある。

①のAは、将来を見据えた上で今後は一般的な賃貸物件での生活を希望している。そのため、東京GHを退室した後は、シェア居住を選択しないであろうと考えている。また、②のCは、東京GHやシェア居住という住まい方に一定の満足を感じていると捉えることができる。そのため、必要に迫られない限り現在の居住形態を変える意向はないと考えられる。B、D、Eの3名は、今後の生活拠点が大きく変わる予定（もしくは可能性）があるため、③に該当すると考えられる。

したがって、5名の東京GHやシェア居住に対する考え方は様々であるものの、いずれも東京GHでの生活を一時的なものと考えていると捉えることができる。

表6：東京GH以前の住まい方と今後の展望[*1]

A	【以前】知人と一緒に住んでいた。 【今後】今後のことについては、まだ決めていないが、「普通の賃貸住宅を借りて、あの娘と今後の人生を模索していきたい」と思う。次は、シェア居住をしないと思う。
B	【以前】約9年間、東京都区内のアパートで一人暮らしだった。 【今後】来年海外に行く予定であり、おそらく「向こうでシェアをする予定」である。日本に戻ってきた際に、「東京GHが空いていれば入るのを検討するかも」しれない。「でも、今のメンバーだから、(東京GH内が）いい雰囲気になっているのかも」と思う。
C	【以前】3人で1部屋を使用する●●●の寮に住んでいた。 【今後】「ずっとこの住み方をしたい」。一人暮らしは寂しいからしたくなく、年を重ねても同じような年代の人たちと集まり、このような住まい方をしていたいと思うことがある。
D	【以前】実家暮らしだった。 【今後】特に考えていない。「シェア生活を続けるかもしれないし、一人暮らしをするかもしれないが、(今後どうするかということについては）就職先に応じて変わると思う。」
E	【以前】実家暮らしだった。 【今後】「もうすぐ東京GHを退去して、実家暮らしをする予定」である。ただし、再来日するつもりなので、「そのときはまたどこかのGHに住むかもしれない」。

*1 表中のGHは、居住型ゲストハウスの略である。また、()内は筆者らによる補足である。

(3) 東京GHでの生活上、個々人が気をつけていること

東京GHでの生活上、5名それぞれが気をつけていることを表7にまとめた。

その結果、個々人が生活上気をつけていることの一つとして、他の居住者の内情には過度に干渉しないようにしているという点が明らかになった。これは、東京GHに住まうメリットとして表8で挙げられている、他の居住者との会話が可能といった点や他の居住者の存在が感じられるといった点と矛盾しているともとれる。しかしながら、筆者らは、この両面性がシェア居住や居住者間の交流を行う上で重要なポイントとなると考えている。この点については、

今後本事例を詳細に検証することで証明したいと考えている。

また、シェア生活上、共有スペースなどを利用する際には、居住者同士の何らかの配慮が必要であると考えられる。この点に関しては、夜中は静かにしたり共有スペースでは自分の荷物を片付けるようにしたりすることで、生活サイクルが異なる居住者同士の共同生活を成り立たせていると考えられる。

表 7：東京 GH での生活上、個々人が気をつけていること

A	特になし。
B	「人に干渉しすぎないようにしている。その人のスペースや距離というものがあるだろうから、それをとるようにしている。」同様に、互いに話しやすいということが、東京 GH の良さであると思うが、あまり他の居住者のことについて言ったり聞いたりしないようにしている。
C	あまり他人に踏み込まないようにしている。
D	寝タバコは絶対にしないということと、喫煙室が汚ければ片付けるようにしている。また、あまり他の居住者と会わない生活を送っているため、仕事から帰宅する午前 3～4 時に物音をたてないようにしている。
E	夜中は静かにする。自分の荷物を散らかしたり、置きっぱなしにしたりしないようにしている。また、足音が響きやすいと思うので、自分のスリッパの音には気を付けている。

(4) 東京 GH に住まうメリット及びデメリット

5 名の東京 GH に住まうメリット及びデメリットを、表 8 にまとめた。

これらの結果を踏まえると、東京 GH に住まうメリットは、経済性や立地の良さという資金的・物理的メリットよりも、他の居住者とのコミュニケーションをメリットとして挙げる者が目立った。

一方、東京 GH に住まうデメリットは、施設・設備面や同居者に対する配慮の欠如が挙げられた。これらのデメリットは、東京 GH やシェア居住に限ったものではなく、一般的な賃貸物件においても同様であると考えられる。その反面、住まいに友人を招くことが困難であったり共有スペースに物が蓄積されたりする点は、シェア居住ゆえの課題であると考えられる。

4．東京 GH 居住者の休日の過ごし方について

4－1 アンケート調査による休日の過ごし方の把握

1）調査概要

東京 GH 居住者を対象に、休日の過ごし方に関するアンケート調査を実施した。調査対象者は、3-1 で取り上げた東京 GH 居住者 26 名である。調査期間は、2009 年 6 月 30 日～8 月 18 日、及び 10 月 3 日である。また、調査手順は東京 GH 居住者に対面した上で協力を依頼し、調査票を手渡し、後日もしくはその場で直接回収するという方法を採用した[14]。その結果、調査対象者 26 名の内 20 名の回答を得られた。

表 8：東京 GH に住まうメリット及びデメリット

	上段：東京 GH に住まうメリット 下段：東京 GH に住まうデメリット
A	・生活費が安い。 ・「さっき*1 みたいにお肉をくれる。」つまり、予想をしていない人から予想していないものをくれるときがある。 ・お酒を飲んでいて、話し相手がいるから楽しいときもある。
	・「友人を呼べない。特にかわいい子。」 ・米を炊こうと思ったら、2 つある炊飯器のどちらもが先に使用されていて使えないことがある。 ・毎朝、ほぼ同じ時間に一階のシャワー室を利用するが、ここ最近 2 つあるシャワー室のどちらもがその時間帯に使用されている。「今までこんなことはなかったのに。」
B	・オーストラリアからの来日者 F さんと英語を使って話せるという環境があること。ありふれた言い方かもしれないが、「生きた英語を使えるので、モチベーションアップにつながる」。 ・自分の家族は嫌いではない。しかし、家族と暮らしていると場合によっては息苦しくなることもあるが、ここではそういったこともない。 ・「家に帰ってきて、しゃべる人がいるというのがいい。」
	・マナーが良くない人もいる。普段あまり挨拶や話をすることのない人には、特に「ガツンと言えない」。
C	・人が大勢いる。 ・仕事から帰ってきたら、リビングに明かりがついていたり、誰かが居たりする。
	・「ない。」
D	・仕事から帰宅するとラウンジに電気が付いているから、安心する。 ・みんな、仲が良い。 ・外国人もいるし、色々な仕事に従事している人もいるので、自分とは異なる世界を身近に感じることができる。
	・特に、デメリットは感じない。ただ、普段は仕事から帰ってきたらラウンジに誰かはいるけれど、時々誰もいないときがある。そういうときは、さみしさを感じるときもある。
E	・立地が良い。 ・「人が多くて楽しい。でもそれはデメリットにもなっている。」 ・女性用のリビングがあるため、そこに夜中まで居られるし、ラフな格好でも居られるところ。
	・人が多い。そのため、以前住んでいた人の物が冷蔵庫や棚に残ったままになっている。それらは、誰の所有物であるかが分からないために捨てるに捨てられない。 ・足音が響く。

*1 調査日の夕食時に、G が肉を焼き、一人では食べきれないので、近くにいた H に半分あげた。H は、その一部をリビングで食事をしていた A にあげるという出来事があった。

２）結果

17 あるアンケート調査項目[15]のうち、本稿では、(1)休日日数、(2)休日における東京 GH 内での過ごし方（①主な居場所、②そこでの行為）、(3)休日における東京 GH 外での過ごし方（①誰と過ごすか、②何をして過ごすか）について、下記の表 9～13 にまとめた。

(1)休日日数

一週間当たり、休日が何日あるかを尋ねた（表 9 参照）。その結果、日本人男性の約半数は一週間当たりの休日日数が「2 日」と決まっていると回答した。一方、日本人女性の 8 人中 6 人が一週間当たりの休日日数に幅があると回答した。また、「学業も仕事もない日はない」と答えた外国人男性がいることもわかった。

表 9：東京 GH 居住者の一週間当たりの休日日数[*1]

一週間当たりの休日日数	休日日数	日本人 男性（人）	日本人 女性（人）	外国人 男性（人）	外国人 女性（人）	計（人）
決まっている	1 日	1	0	0	0	1
	2 日	5	2	0	1	8
	3 日	0	0	0	1	1
幅がある	1～3 日	0	3	0	2	5
	4 日以上	0	3	0	0	3
その他	月に 1,2 日	1	0	0	0	1
	休日なし[*2]	0	0	1	0	1
不明[*3]		4	0	1	1	6
	計	11	8	2	5	26

[*1] 2009 年 7 月 28 日から 8 月 13 日までの期間中、東京 GH に居住していた者へのアンケート調査結果による。
[*2] この 1 名に関しては、学業にも仕事にも従事していない日はないと答えた。
[*3] これら 6 名に関しては、調査期間中にアンケート調査及び聞き取り調査を実施する機会が得られなかったため、不明とした。

(2)休日における東京 GH 内での主な居場所と行為

①主な居場所：東京 GH 内で休日を過ごす場合、主にどこで過ごすのかその居場所を尋ねた（表 10 参照）。なお、質問に対する選択肢として 7 項目を挙げ、その中から 2 つまでを選択可能とした。

その結果、共有スペースである 1 階ラウンジや 2 階にあるリビング〈大〉などで過ごしたり、個人スペースである居住者自身のベッドの上で過ごしたりしていることが明らかとなった。特に、共有スペースは他の居住者も利用するため、そこでは居住者間の何らかのやりとりが図られていると考えられる。しかし、表 7 の考察で示されたように、居住者間の過度な干渉は控えているのであれば、他の居住者と同じ空間を利用していたとしても目立ったやりとりは見られない可能性もある。この点については、今後詳細な調査を進めたいと考えている。

なお、東京 GH では 1 階ラウンジは全居住者が利用可能であるが、2 階の大小 2 つのリビングに関しては女性専用となっている[16]。

表 10：休日における東京 GH 内での主な居場所[*1]（単位：人）

居場所	回答者数	居場所	回答者数
1 階ラウンジ[*2]	9	ドミトリー内	4
2 階リビング〈大〉	7	2 階リビング〈小〉	2
自分のベッド上	5	その他[*3]	4
喫煙室	5		

[*1] 2009 年 7 月 28 日から 8 月 13 日までの期間中、東京 GH に居住していた者へのアンケート調査結果による。なお、複数回答の結果である。
[*2] 9 名の内、男性 7 名、女性 2 名であった。
[*3] 「その他」の内訳は、休日は外出するため東京 GH 内にはいない（3 名）、2F キッチン（1 名）であった。

②行為：東京 GH 内で休日を過ごす場合、何をして過ごしているのかを尋ねた（表 11 参照）。なお、質問に対する選択肢として 15 項目を挙げ、その中からいくつでも選択可能とした。

その結果、東京 GH 内での休日の過ごし方は、インターネット利用が最も多く、次いで居住者同士の会話、自主学習の順であった。インターネットの利用が、同じく共有物であるテレビの利用に比べて回答者数が多かった理由の一つとして、東京 GH では無線 LAN の使用が可能であるという点が挙げられる。つまり、インターネットの利用機会が、他の居住者の都合や影響に左右されない環境が備わっていると考えられる。なお、東京 GH の 1 階ラウンジには共有のパソコンが 1 台設置されているが、個々人が所有するパソコンを使用する者もいる。また、20 名中 13 名が休日に居住者同士で会話を行っていると答えた。このことから、東京 GH では、居住者間の会話を含む交流は休日に限らず、日常的に行われている可能性があると考えられる。

なお、休日に掃除をすると回答した者は、20 名中 3 名であった。この回答数は、洗濯や炊事などの家事一般と比べやや少ない。この一因として、管理会社が東京 GH 内の共有スペース（キッチンやトイレ、シャワー室など）を定期的に清掃しているという点が挙げられる。また、東京 GH のほとんどが共有スペースであるため、携帯電話による通話を行う者はほとんどいなかった。

表 11：休日における東京 GH 内での活動[*1]（単位：人）

活動内容	回答数	活動内容	回答数
ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ(ﾒｰﾙ含む)	15	携帯電話（ﾒｰﾙのみ）	5
居住者同士の会話	13	趣味	4
自主学習	9	掃除	3
ﾃﾚﾋﾞを見る	8	携帯電話で通話	1
洗濯	8	ｹﾞｰﾑをする	1
読書(ﾏﾝｶﾞ・雑誌含)	7	特になにもしない	0
寝る	7	その他[*2]	2
炊事	7		

[*1] 2009 年 7 月 28 日から 8 月 13 日までの期間中、東京 GH に居住していた者へのアンケート調査結果による。なお、複数回答の結果である。
[*2] 「その他」の内訳は、DVD 鑑賞（1 名）、研究（1 名）だった。

(3) 東京 GH 外における休日の過ごし方

東京 GH 外における休日の過ごし方として、①誰と過ごすか、②何をして過ごすかの 2 点を尋ねた。

①休日を過ごす相手：東京 GH 外で休日を過ごす場合、誰と過ごすかを尋ねた（表 12 参照）。なお、質問に対する選択肢として 8 項目を挙げ、その中からいくつでも選択可能とした。その結果、友人や他の東京 GH 居住者、職場関係の人たちと回答した者が約半数に上った。なお、学校の仲間や親、兄弟姉妹と過ごすと答えた者はいなかった。

表 12：東京 GH 外で休日を過ごすときの相手[*1]（単位：人）

相手	回答者数	相手	回答者数
友人	10	ひとり	6
東京 GH 居住者	9	恋人	2
職場関係の人	9		

[*1] 2009 年 7 月 28 日から 8 月 13 日までの期間中、東京 GH に居住していた者へのアンケート調査結果による。なお、複数回答の結果である。なお、学校の仲間、親、兄弟姉妹と過ごすと答えた者はいなかった。

②行為：東京 GH 外で休日を過ごす場合、何をして過ごすかを尋ねた（表 13 参照）。なお、質問に対する選択肢として 12 項目を挙げ、その中からいくつでも選択可能とした。

その結果、上位を占めたのは食事やショッピング、街をぶらぶらするなどであった。これらの行為は、個別の行為として行うことも可能であるが、同日に一連の行為を行うことも可能である。具体的には、休日に街をぶらぶらしながらショッピングをし、その後に食事をするとも考えられる。そのため、今後は東京 GH 居住者が住居外でどのような休日を過ごしているかという点について、より具体的に実態を把握する必要がある。

表 13：休日における東京 GH 外での過ごし方[*1]（単位：人）

過ごし方	回答者数
食事	14
ショッピング	11
街をぶらぶらする	11
勉強・セミナー参加	6
適当な場所でおしゃべりをする	5
スポーツをする	3
友人・恋人宅で過ごす	3
クラブやライブに行く	3
美容	2
趣味	2
その他[*2]	5

[*1] 複数回答の結果である。
[*2] 「その他」の内訳は、仕事に関する作業(1)、酒を飲んだり友人と遊んだりする(1)、海に行く(1)、カフェ会に行く(1)、自宅で過ごす(1)である。なお、()内は回答者数である。

４－２聞き取り調査による休日の過ごし方

１）調査概要

3-2 で取り上げた 5 名、及び上述のアンケート回答者 20 名に対し、休日の過ごし方について聞き取り調査を実施した。調査方法は半構造化インタビューを採用し、休日はどのように過ごしているのかについて質問した。なお、調査実施日については居住者によって異なるため、それぞれ脚注に示した。なお、下記の聞き取り調査結果の表現は、聞き取り対象者の発言を筆者らが補足した上で、まとめたものである。また、個人名については●印を用い、伏せ字とした。

２）3-2 で取り上げた 5 名の聞き取り調査結果

Ａ：東京 GH 内で休日を過ごすことはほとんどない。共通の趣味を通して知り合った者と、外でスポーツやバーベキューをしたり、野外イベントに行ったりし、その後は「居酒屋などに飲みに行く」[17]。なお、Ａに、他の東京 GH 居住者と休日を過ごすことはあるかと尋ねたところ、「あまり外で遊んだことはない。●●や●●●さんとは、たまにある」ものの、そういったことは 3 ヶ月に 1 度あるかないかであると答えた。

Ｂ：以前、一人暮らしをしていた場所と比べると、東京 GH 周辺にはレストランなどが多い。そのため、「休日に巡ってみたい」と思う[18]。なお、一人暮らしをしていた時期は、自室でインターネットをしたり、ギターを弾いたりして、ひとりで過ごすことが多かった。

Ｃ：休日が、月に 4 日程度のＣは、その変則的な休日の取得状況のため、「友人とも予定を合わせられない」「(予定を)合わすのが面倒くさい」と述べている[19]。そのため、休日

は東京GH内で、寝ているか、DVDを借りて見るなどして過ごすことが多い。

Ｄ：東京GH内で、学校から出された課題や自主学習に取り組んでいることが多い[20]。また、料理をしたり、マンガを読んだりもする。時々、他の東京GH居住者と外出したりするが、休日のほとんどは東京GH内で過ごしている。

Ｅ：同じ出身国の者とは、「（日本に来る）以前から行きたかったところや、ガイドブックに載っているところ、有名なところに行く」とし、お台場や横浜などに行くとしている[21]。また、東京GHの日本人居住者とは、一緒にテレビを見ているときに取り上げられたレストランに行ったり、ショッピングをしたりしている。

以上が、3-2で取り上げた5名の休日の過ごし方の一側面である。

３）5名以外の東京GH居住者の休日の過ごし方

次に、上記5名以外の東京GH居住者の休日の過ごし方について、東京GH居住者と一緒に過ごす場合と、それ以外の場合の2つに分け以下にまとめた。

前者では、以前東京GHに住んでいた者が主催するバーベキュー兼ミニライブに参加する、クラブやカフェに行く、地域のイベントに参加するなどして過ごしていた。また、日本人居住者が、競馬を観戦したことのない外国人・日本人居住者を誘ってナイトレースを観戦しに行ったり、東京近郊に日帰り旅行に行ったりして休日を過ごしていた。

後者では、職場の友人たちと食事やショッピングに行く、一人で自主学習のためにファミリーレストランやファストフード店に出かける、共通の趣味を持つ友人と過ごす、実家に帰省するなどして休日を過ごしていた。

５．おわりに

５－１ まとめ

本稿では、シェア居住形態が居住者間の交流にどのような影響を与えているのかを考察するために、まずシェア住居の一つである居住型ゲストハウスの概要と特徴を整理した。その上で、調査事例対象として東京GH、及び東京GH居住者を取り上げ、居住者の住まい方に対する意識、及び休日の過ごし方について聞き取り調査とアンケート調査を実施した。

これらの結果は、以下の5点に要約できる。

①東京GH居住者は、20代から30代の若年層を中心に構成されており、出身地に偏りは見られない。また、8割以上の者は何らかの仕事に従事しており、学業のみに携わっている者は少ない。

②東京GH居住者は、休日を定期的に取得できている者とそうでない者の2つに大別することができる。そして、東京GH内で休日を過ごす場合は、共有スペースで過ごすことが多く、主な活動内容はインターネット利用や居住者同士の会話などが挙げられる。

③一方で、東京GH外で休日を過ごす場合は、その相手として友人や職場関係の人びと以外に他の東京GH居住者を挙げる者がいる。

④個々人の生活拠点の移動必要性を契機に、主にインターネットや友人知人を通して居住型ゲストハウスの存在が知られている。

⑤東京GHに住まうメリットとして、居住者同士の会話などを挙げている一方で、他の居住者に対する過度な干渉は控える側面が見られる。

以上を踏まえると、東京GH居住者の住まい方に対する意識及び休日の過ごし方の特徴として、以下の三点を指摘できよう。

第一に、面識のない20代から30代の若年層の一部は、従来の学校や職場などから発展した交友・交際関係とは異なり、住まいや住まい方を共通基盤とした人間関係を構築しているという点である。このように、面識のない者同士の関係性構築の一因として、居住型ゲストハウス内における日々の挨拶や会話などといった居住者間交流が展開されていることが挙げられる。

この居住者間交流の具体的な内容としては、「おはよう（おやすみ）」や「いってきます（いってらっしゃい）」、「ただいま（おかえり）」などといった日々の挨拶の他に、居住者同士で次の休日の過ごし方について相談をする、旅行などから戻ってきた時に他の居住者に土産物を配る、テレビ番組の内容について意見交換をする、インターネットの動画サイトを一緒に視聴する、化粧品や服について情報交換をするなどが挙げられる。

第二に、そのような居住者間交流は、両者の共通基盤である居住型ゲストハウス内に留まらず、その外への交流活動に発展するという広がりをみせている点である。例えば、上述したような例、すなわち、休日に居住者同士でバーベキューやクラブに行ったり、日帰り旅行に出かけたりするという活動が挙げられる。

なお、居住型ゲストハウス外へと交流活動が発展するきっかけは多様である。例えば今回の調査でも、2階リビングで女性居住者2人と筆者がテレビ番組を見ていたときに、東京GHの近所にある飲食店が取り上げられたことを受け、「明日、一緒にランチに行こう」という女性居住者の発言

がきっかけとなって居住型ゲストハウス外での交流活動に発展するといった例が確認されている。こうした居住者間交流の質的分析については今回の調査では不十分な点が多いため、今後の課題としたい。

第三に、一部の居住者は、プライバシーや生活リズムを尊重し合う住みよい居住空間を構築していこうという住まい方に対する自律的な意識を抱いた上で、人と人との交流ある生活を希求している点が指摘できる。その根拠として、他の居住者とのコミュニケーションをメリットとしながらも、互いに過度な干渉を控えているという意見が挙げられる。

５－２　今後の課題

本研究における今後の課題は以下の通りである。

①本研究は、一か所の調査事例を基にした結果及び考察である。このため、本稿の特性を以ってそれらが居住型ゲストハウス及びそこでの居住者に共通する特性とはいえない。また、他の居住型ゲストハウス及び居住者との比較検証ができていない。したがって、今後は複数の居住型ゲストハウスを対象に調査を進める必要がある。

②本稿では、東京 GH での居住歴の長短や居住者個々人のこれまでの居住形態の変遷、収入などといった点を考慮した考察ができなかった。今後は、GH 居住者の住まい方の変遷やその頻度、経済状況などを踏まえた考察も行う必要がある。

③本稿では、これまでに面識のなかった者同士が住まいを通して交流機会を得ているであろうということは把握できたが、その根拠を明確に示せるまでに至っていない点。この点に関しても、より詳細な調査研究を進めていく必要があると考えている。

謝辞

本研究を行うにあたって、調査にご協力いただいた東京 GH 居住者の皆様、東京 GH の運営管理業者の皆様、財団法人住宅総合研究財団の図書室スタッフの皆様、『ゲストハウス白書 2008』を寄贈してくださった株式会社ひつじインキュベーション・スクエアの佐藤氏に、厚く御礼申し上げます。

＜引用・参考文献＞

1）丹羽哲也・布野修司・モハン パント・山本麻子・山田協太 2005「共住住居（シェアハウス）の設計手法に関する研究」『住宅総合研究財団研究論文集』財団法人住宅総合研究財団、No.32、pp.189-200

2）小林英樹 2007「今、なぜ、シェア居住か」『すまいろん』、財団法人住宅総合研究財団、2007 年春号（82 号）、pp.4-7

3）住宅総合研究財団編 2007「シェア居住のすすめ―調査と体験から　第Ⅰ部シェア居住を考える―調査から」『すまいろん』財団法人住宅総合研究財団、2007 年春号（82 号）、pp.8-17

4）丁志映・小林英樹 2008「都心部における単身者向けのシェア居住に関する研究―ゲストハウスの選択理由と規模別による共有空間の使われ方―」『都市住宅学』日本都市住宅学会、63 号、pp.75-80

5）中村友樹・石坂公一・大橋佳子 2009「都市における居住型ゲストハウスの特性」『日本建築学会計画系論文集』日本建築学会、Vol.74(636)、pp.423-429

6）飯田詠子・藤田みなか・初見学 2006「シェア居住からみる都市共住の在り方　その 1」『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会、pp.45-46

7）彰国社 2007『建築大辞典第 2 班〈普及版〉』、彰国社 pp.751,869。

8）株式会社ひつじインキュベーション・スクエア 2008『ゲストハウス白書 2008』株式会社ひつじインキュベーション・スクエア、 pp.8-33

9）今一生 2004『ゲストハウスに住もう！TOKYO 非定住生活』晶文社、pp.142

10）東京都住宅局 2004『東京都住宅白書―都心居住の第二幕―』東京都住宅局総務部住宅政策室、pp.108

＜注＞

1）「シェア居住」とは、小林〔2007: 4〕によれば、「家族ではない複数の居住者が台所などを共用して一つの家に住む形態」であり、雑誌『すまいろん』の「特集記事のためにつくった造語」であるとされている。ただし、筆者らが調べた限りにおいては、2006 年 9 月に開催された日本建築学会において、東京理科大学の初見氏を中心としたグループが、「シェア居住」という用語を用いた研究発表を行っている〔飯田ら 2006〕。

2）彰国社〔2007: 751,869〕を参考とした。

3）東京 GH では、2 名以上の居住者が同一の部屋を使用する相部屋のことをドミトリーと呼んでいる。そのため、本稿においてもそれに従うこととする。

4）一般的な住居にあるリビングに該当する空間を、居住型ゲストハウス物件下では「ラウンジ」と呼ぶのが一般的である。そのため、本稿においてもそれに従うこととする。ただし、東京 GH の 2 階部分にあるリビングは、女性専用となっており、居住者全員が使用可能な空間ではないためか、居住者の間においてもラウンジとは呼ばれていない。そのため、2 階の大小二つのリビングについては、ラウンジとせず、リビングと表記する。

5）居住型ゲストハウス内の入居者数が 1～10 人の物件は 223 件、11～20 人が 102 件、21～30 人が 42 件、31～40 人が 31 件、41 人以上は 29 件である〔『ゲストハウス白書』2008: 16〕。なお、調査対象物件は、「ゲストハウス・ガイドブクひつじ不動産に登録されている物件と、調査に協力した事業者の物件、及びインターネットで独自に調査を実施した値の合計」〔『ゲストハウス白書』 2008: 16〕とされており、調査範囲が全国であるのか、関東周辺であるのかは明記されていなかった。ただし、注 6)で東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県の 1 都 3 県の物件を対象としている点、ポータルサイト「ゲストハウス・ガイドブクひつじ不動産」に掲載されている物件が主に関東圏である点を踏まえると、上記のデータも注 6)と同様の地域を対象としていると考えられる。

6）首都圏とは、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県の 1 都 3 県を指している。その 1 都 3 県における居住型ゲストハウスの物件数は、1980 年及び 1985 年は 0 件、1990 年は 2 件、2000 年は 31 件、2005 年は 175 件、2007 年は 429 件であり、その増加は右肩上がりである〔『ゲストハウス白書』2008: 14〕。また、個室・ドミトリー含むベッド総数も増加しており、1995 年 295 床、2005 年 2,893 床、2007 年 6,897 床となっている〔前掲書〕。

7）我が国が実施している国勢調査は、その対象が世帯となっているために、シェア居住形態を採用している人びとの実数を把握することができないのが現状である。しかしながら、小林が平成 12、17 年の国勢調査を基に推計した結果によると、

シェア居住は、20 代から 30 代前半に集中してみられる居住形態であり、その数値は平成 12 年よりも平成 17 年のほうが大幅に増加していることがわかる〔小林 2007： 5〕。そのため、小林は「最近のシェア居住への関心の高まりと一致している」と述べている〔前掲書〕。

８）例えば、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）サイトの「mixi」では、「ゲストハウスに住みたい」「ルームメイト募集中」などのコミュニティが複数存在し、貸し手と借り手の双方による情報交換が行われている。また、不動産や管理会社等の物件供給側としては、自社のホームページや「ゲストハウス・ガイドブックひつじ不動産」などのポータルサイトを通して、入居希望者に対し、従来よりも低コストで物件情報の発信が可能になった。

９）残る 3 つの要因は、以下の通りである。1)若年層の収入面での二極分化が進んでいること、2)近年の犯罪増加に伴う女性の一人暮らしに対する不安があること、3)既存住宅の有効な活用手段の一つとされていること。

10）しかしながら、それぞれの要因と居住型ゲストハウスの増加が、どのような関係性の下で発展してきたのかなどの詳細な報告はほとんど行われていない 。

11）居住型ゲストハウス経営者へのインタビューによる（調査日 2009 年 9 月 29 日、調査者による）。なお、外人ハウスとは、元々、「終戦後にアメリカ軍基地の近くに建てられた家のこと」を指していた〔今 2004: 142〕。最近まで来日外国人が住まう住居は限られていたため、外国人が集中して住んでいる物件がこのように呼ばれていたと考えられる。

12）これら日常生活に必要な備品は、いわゆるマンスリー（またはウィークリー）マンションなどにも常設されている。しかし、それらと居住型ゲストハウスとの相違点の一つに、共同でそれらを使用するか否かという点が挙げられる。

13)民間賃貸住宅経営者の約 4 分の 1 が、外国人や高齢者等の入居制限を設けている〔東京都住宅局　2004: 108〕。

14)なお、日本人 1 名と外国人 1 名に関しては、調査者がアンケート質問項目を読み上げた上で、2 名がそれに対して日本語で答えるという方法を採用した。

15)調査項目は、大きく 3 つに分けられる。①仕事や学校がある日の東京 GH 内外での過ごし方、②休日の東京 GH 内での過ごし方、③休日の東京 GH 外での過ごし方。
①では、1)一週間当たりの労働日数、2)労働時間、3)休日日数、4)東京 GH から仕事場や学校に行く前にどこかに立ち寄るか、5)4 での立ち寄りスポット、6) 仕事場や学校から東京 GH に帰るまでにどこかに立ち寄るか、7)6 での立ち寄りスポット、8)仕事や学校を終えた日は主に東京 GH 内のどのスペースで過ごすか、9) また主に何をして過ごしているか、の 9 項目である。②では、1)どのスペースで過ごすか、2)主に何をして過ごしているか、の 2 項目である。③では、1)誰と過ごすか、2)主に何をして過ごしているか、3)支出金額、4)外出時間帯、5)帰宅時間帯、の 5 つである。最後に、居住者の属性（性別・年齢・出身地）を問う 1 項目を加えた、全 17 項目である。

16)ラウンジとリビングの呼び方の違いについては、注 4 を参照されたい。

17)2009 年 7 月 5 日の聞き取り調査による。

18)2009 年 7 月 6 日の聞き取り調査による。

19)2009 年 7 月 14 日の聞き取り調査による。

20)2009 年 8 月 4 日の聞き取り調査による。

21)2009 年 7 月 15 日の聞き取り調査による。